

陳 翀（中国文学）

廬山の風土と白居易の文学

本研究は、中国古典文学、就中、中国の詩文集編纂と中国中世における仏教寺院との関係について考察したものである。本論文の提出者は、特に唐の詩人白居易を中心に、日本と中国の近年来の研究動向を十分に咀嚼した上で、日中双方に残る貴重資料の調査結果を駆使し、かつ、その考察に当たっては、中国江西省の仏教聖地「廬山」という独自の立脚点を定めることによって、従来にはない刺激的な研究を展開し得た。論文中には、白居易の詩文集『白氏文集』の成立と伝播についての、多くの斬新な見解が提出されているが、それは、本論文提出者の努力研鑽の結果であるとともに、上述の「廬山」という立脚点が、従来の研究の盲点を突く、極めて重要なポイントであったことに拠るものである。

中国江西省の廬山は、これまでの白居易研究にあっては、単にその詩人の四年足らずの左遷地、および仮寓の地としてのみ取り扱われてきた。しかし、本研究では、白居易と廬山との関係を、あらためて白居易の全生涯にわたって検証し、さらに、白居易の没後における『白氏文集』の保存と伝播において、廬山とその寺院ネットワークが重要な役割を果たしていたことを、数々の資料に基づいて証明している。また、近年の中国においても徐々に研究が萌芽しつつある各「地域」に特化した文化・文学活動の研究成果を活かし、江西省の気候風土、そして、そこに根付いた独特の山岳宗教についても考察を展開し、中世中国の知識人（いわゆる士大夫階層）と仏教との関係を、多方向から捉え直した考察は、本論文の最も評価すべき点の一つである。

論文の後半部分では、日本に多数残存する平安から鎌倉時代にかけての白氏文集の筆写・抄録本に目を向け、中世日本と中国との文化交流のありかたについて、新たな考察を展開している。就中、平安初期（とりわけ白居易存命中）に蘇州の南禅院にて『白氏文集』を筆写した日本僧・慧萼の事績については、彼が日中の文化交流（中世仏教文化の日本伝来）において重要な役割を果たしていることを論証し、橋本進吉ら従前の研究に多くの訂正を加えている部分は、本研究論文の中でも、とりわけ意義深い研究業績と言える。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力をもつことを認めるものである。